世界死刑廃止デーを機に考える

死刑のない社会

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

一〇月一〇日は、世界死刑廃止連盟（ＷＣＡＤＰ）が決めた世界死刑廃止デーでした。その呼びかけから四年目になる今年も世界各地でさまざまな取り組みがなされました。日本では一〇月七日に東京で集会がもたれ、一〇月一〇日までの間、全国各地で街頭での宣伝活動が行なわれました。私たちも一〇月一〇日の朝、霞ヶ関で、法務省や裁判所に出勤する人々に死刑制度の廃止、執行の即時停止を訴えました。

☆★☆

アムネスティ・インターナショナルの調査によれば、本年９月現在、死刑を廃止している国と一〇年以上も執行をストップしている事実上の死刑廃止国を合わせると１２９か国にもなります。それに対して死刑制度を存置している国は６８か国なのですが、死刑大国と言われるアメリカも１２の州では死刑を廃止しており、昨年に実際に執行を行ったのは２２か国でしかありません（残念ながら日本もその一つでした）。

１９８０年には死刑存置国が１２８か国であったことを思えば、世界が死刑廃止に向かってきたことは歴然としています。アジア地域でも、フィリピンでは本年６月に再度死刑が廃止されました。韓国は金大中前大統領の就任以降、執行がなされていません。

☆★☆

もちろん、私たちは、世界のブームだから、という理由で、死刑を廃止しようというのではありません。

市民の中には「死刑がなくなったら凶悪な犯罪が増えてとんでもないことになるんじゃないか」という心配を抱いている方が少なくありません。

それがまったく根拠のない「おそれ」であることを、すでに死刑を廃止した国・地域がこれほどあるという事実から学びたいと思うのです。

「凶悪な犯罪」が報道されるたびに、だから死刑も必要だ、と思われるかもしれません。しかし、その犯罪は、まさに死刑制度を存置し、毎年執行を繰返している数少ない国、この日本で起こっているのです。

★☆★

「それじゃ、被害者（やその遺族）の気持ちはどうなんだ？」というのが次にくる疑問です。

まだなじみが薄い言葉ですが、「修復的司法」という試みが世界各地で実践されています。報復の感情は、簡単にぬぐえるものではないにせよ、それも含みつつ、真に被害者の求めるものを探り、応えていこうとする取り組みです。

世界から学ぶことはたくさんありそうです。